ダム下流治水安全度向上と地域活性化への取り組み ～名張かわまちづくり一体型浸水対策事業（Ⅰ期）～

宮成　慶[1]・國松　史裕[2]

[1]木津川上流河川事務所 工務課 （〒518-0723三重県名張市木屋町８１２－１）

[2]木津川上流河川事務所 工務課 （〒518-0723三重県名張市木屋町８１２－１）

引堤事業（浸水対策事業）を進めている名張川黒田地区周辺では、歴史的資源が豊富で、またこれまで花火大会などの行事なども盛んに行われており、「名張の玄関口」としての機能を有している。これらの地域特性より、引堤事業とあわせて親水性を高める河川整備も一体的に実施し、地域の川を活かした様々な活動を支援する名張かわまちづくり事業を進めることとなった。

現在、名張市を中心に地域で活動する各種団体で構成される名張かわまちづくり協議会が設立され、国が進める名張川改修事業との連携により地域活性化に繋がる取り組みを進めており、これまでの取り組み状況及び今後の展望について報告する。

キーワード　*引堤事業,かわまちづくり,地域活性化*

1. はじめに

名張川においては、河川整備計画に基づき昭和28年台風13号に対して洪水を安全に流下させ、かつ上流ダム群（青蓮寺ダム、比奈知ダム、室生ダム）が本来有している洪水調節機能を発揮できるよう築堤及び河道掘削による改修を進めている。

一方、名張川周辺は初瀬街道沿いの宿場町などの歴史的資源が豊富で、祭礼や納涼花火大会といった伝統行事なども盛んに行われており、「名張の玄関口」としての機能を有している。

これらの地域資源や地域の知恵を活かした「名張かわまちづくり計画」が平成31年3月8日に新規登録されたことを受け、黒田地区の引堤にあわせ、名張川の河川空間を活かしたまちづくりを進めることとなった。

現在、名張市を中心に地域で活動する各種団体（地域まちづくり団体、商工会議所、観光協会、教育委員会、漁協、NPO、近畿日本鉄道（株）、地元区長）で構成される名張かわまちづくり協議会が設立され、国が進める名張川改修事業との連携により地域活性化に繋がる取り組みを進めており、これまでの取り組み状況及び今後の展望について報告する。

2. 名張川における洪水の歴史と改修事業

⑴ 洪水の歴史

名張川は大雨や台風による洪水で、これまでに甚大な被害を受けてきた。

昭和28年9月台風13号では、名張市で浸水戸数967戸となるなど甚大な被害をもたらし、淀川水系河川整備計画において、「名張川において、昭和28年台風13号洪水を安全に流下させるために引堤及び河道掘削を実施する」と定められた。

また、昭和34年9月伊勢湾台風では、２日雨量368ミリ、名張市内で浸水戸数2284戸、湛水面積1540haを記録し、豪雨により名張川が数カ所で決壊氾濫し、橋の流失が相次ぎ、濁流が市街地の高台を除く全域に流れ込み、繁華街は泥海となった。浸水被害をはじめ、家屋流出など、人命財産に多大なる被害をもたらした。（写真-1）

その後も出水による被害を受けており、近年では、平成29年10月台風21号で２日雨量366ミリを記録し名張川支川宇陀川で溢水による浸水被害も発生した。

写真－１　昭和34年9月伊勢湾台風により流出した新町橋

⑵名張川におけるこれまでの治水事業の歴史

名張川では、昭和56年に河川改修に着手し、平成15年に黒田地区より上流の引堤及び築堤護岸が完了した。

また、昭和34年9月伊勢湾台風による出水を契機に、上流に青蓮寺ダムが昭和45年に、室生ダムが昭和49年に建設された。

その後も大出水が相次ぎ被害が発生し、人口、資産が増大したことから、比奈知ダムが平成11年に建設された。

その後、平成21年3月に淀川水系河川整備計画が策定され、流下能力ネック箇所である黒田地区、朝日・南町地区の改修が新たに位置付けられた。特に黒田地区は「名張の玄関口」としての機能を有していることから、同改修と併せた「名張かわまちづくり一体型浸水対策事業」として、引堤、河道掘削等に加え、親水空間の整備を一体的に行い、出水による被害軽減とともに、河川空間の利用促進を目指している。

3.名張かわまちづくり一体型浸水対策事業の概要

⑴河川改修の概要と治水における整備効果

名張川、宇陀川、青蓮寺川の３川が合流する名張市街地周辺では、人口・資産が集中するが、淀川水系河川整備計画の対象規模洪水（昭和28年9月台風13号）において、基準地点枚方におけるピーク流量みあいでの上流ダム群（室生ダム、青蓮寺ダム、比奈知ダム）の操作を行った場合、この名張市街地周辺の河川流下能力では安全に流下させる事ができないことが長年の課題となっている。

そのため、現況のダム操作は、暫定の操作規則を設けて、ダムが計画された時点の本則操作より少ない流量を放流するようにしている。

一方で、こうしたダムの操作は名張市街地を守るためにダムの洪水容量を先遣いするため、下流大都市にとっては、ダム計画時点の治水効果を十分に期待できない状態となる。このため、早急に河道の流下能力を向上させる必要に迫られている。

名張かわまちづくり一体型浸水対策事業では、流下能力ネック箇所である、黒田地区（Ⅰ期）、朝日・南町地区（Ⅱ期）を引堤、河道掘削などにより、ダム下流の治水安全度の向上を図る。

特に先行的に着手する黒田地区（Ⅰ期）においては、最大引堤幅約70mから約140m、延長約1kmの引堤、併せて河道掘削を行う。

今年度は、過年度より実施している河道掘削の継続実施の他、用地取得及び樋門築造を含む築堤工事に着手する。防災・減災・国土強靱化のための緊急3か年対策としての整備効果も段階的に発現しながら、令和5年の黒田地区（Ⅰ期）の完成を目指す。（図-1）

図-1　黒田地区　名張川引堤計画イメージ図

⑵事業の特徴（かわまちづくりと一体となった整備）

事業箇所周辺は、地域の歴史文化や川とのつながりを有していることから、それらを活かした賑わい創出の場となりえるポテンシャルを有している。

引堤により、左岸側の堤外地に広大な空間が生まれることを契機に河川を活かしたまちづくりへの機運が高まっていることから、改修事業だけではなしえない、引堤を行わない右岸側もかわまちづくり事業により一体的に整備することで、河川空間の利用促進を図ると同時に、改修事業による治水安全度の向上と一体となった整備効果を発現することを目標としていることが特徴である。

4.名張川周辺の地域資源と地域とのつながり

⑴名張川周辺の歴史的資源

初瀬街道は、江戸時代におかげ参りの主要ルートとして多くの善男善女が旅枕を重ねたとされる。街道筋に多くの名所旧跡が残る名張の「まちなか」は、名張川まで徒歩20分で到達できる位置関係にあり、全体としてコンパクトで情緒あふれる「歴史と文化が融合するまち」である。（図-2）

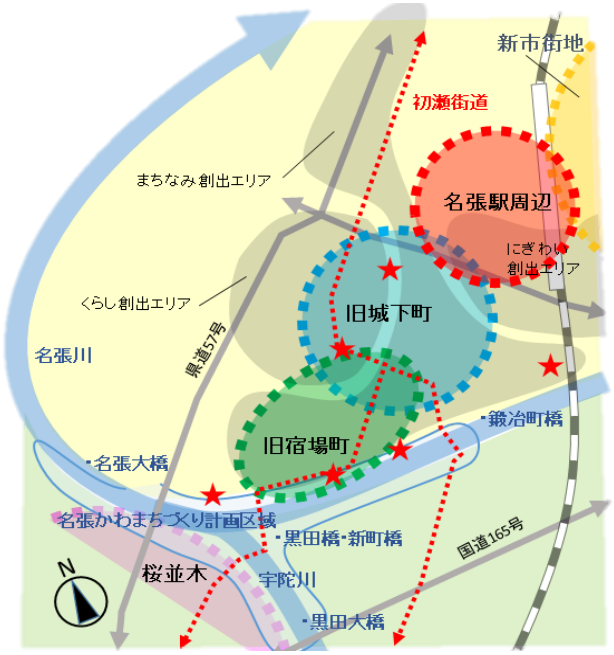


図-２ 名張まちなかの地域資源

一方、「まちなか」を流れる名張川に架かる橋や名張川護岸などからは、名張川の流れや山並みを背景に美しい風景が望める。江戸時代の錦絵（二代目広重作）である「諸國六十八景・伊賀名張」には、豊かな名張川の流れや小高い丘を背景に、街道沿いのまちが描かれている。（写真-２）

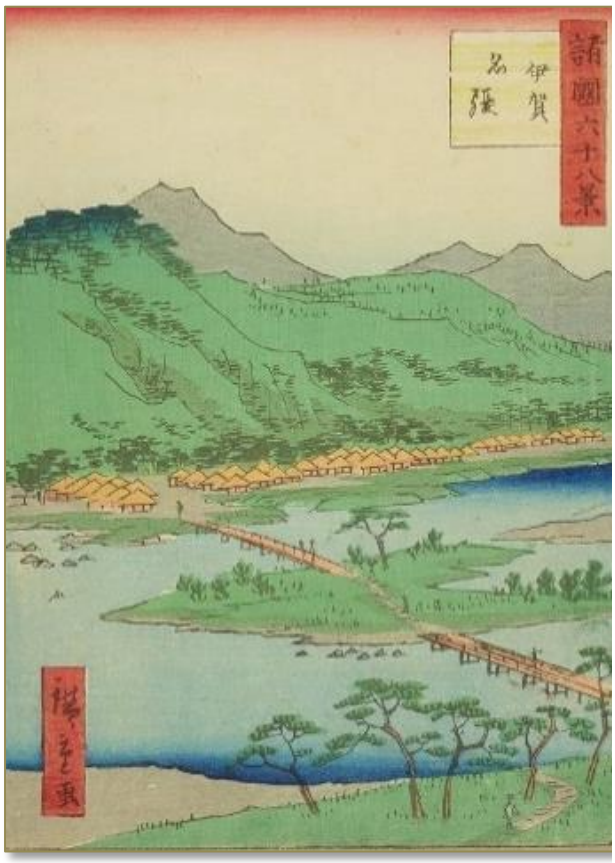


写真-２　諸國六十八景・伊賀名張

⑵祭礼や花火大会の伝統行事等

毎年夏に、名張川河畔で火の神様を鎮めるお火渡りの神事「愛宕の火祭り」（写真-3）として名張川の両岸にかけて一周めぐることや、「名張川納涼花火大会」（写真-4）においては左岸側で打ち上げられる花火を右岸側から観賞できることもあり、多くの人出で名張川が賑わい、両岸が一体となった取り組みがすでになされている。

写真－３　愛宕の火祭り

写真－４　名張川納涼花火大会

⑶名張川とまち・人とのつながり

名張川は、かつては川での水泳訓練等も行われており、地域の身近な水辺として利用されてきた。（写真-5）

現在は、鮎釣り等を楽しめる場所であり、稚鮎の放流

や「あゆバトルin名張川」等のイベントが名張川漁業協同組合により開催されている。

写真－５　名張川での水泳訓練

河畔の桜並木は、地域住民の花見や散策等に親しまれており、また、地域住民により清掃ボランティアの取り組みが継続的に行われている。さらに、川に隣接している「やなせ宿」では、江戸時代には初瀬街道の宿場町として栄え、名張八宿と呼ばれた賑わいを再生し、人々が集う場所となることを目指しており、初瀬街道と名張川をつなぐ重要な結節点として、名張の玄関口・名張川に相応しい各種交流の場として利用されている。また、この「やなせ宿」と前面の堤防天端、水辺空間は、一体的なコミュニケーションスペースとして、様々なイベント等にも利用されており、名張川の重要な賑わい拠点として、さらなる機能向上も求められている。（写真-6）

写真－６　やなせ宿主催 やなせ祭り

5.名張かわまちづくりに関する取り組み

⑴ かわまちづくりに向けた地域の合意形成

黒田地区の引堤により新たに生まれる広大な河川空間を活用したまちづくりを目指し、平成29年度より「名張川ワークショップ」を行った。参加メンバーは学識者、地元団体、関係団体、行政、河川管理者とし、多様な視点に基づき意見交換を行った。

名張川ワークショップを行うことで、関係者間での川づくりや地域づくりについての考え方や想い等が共有され、国の引堤事業にあわせたまちづくりの機運が高まった。

これにより、名張市、まちづくり関係者等において、名張川周辺の地域資源や伝統行事を活かした賑わい創出の場となるようなまちづくりを目指すこととなり、かわまちづくり支援制度に基づく、名張かわまちづくり協議会の設立につながった。

⑵ 名張かわまちづくりの目指すべき姿

名張川を中心とする自然環境の魅力を活かし、地域資源や伝統行事等と融合するまちづくり（回遊性の向上）として、「名張の玄関、名張の顔」をコンセプトとし、名張（まちなか）の活性化の実現に向けて、各種課題に対応する目指すべき姿を、名張市、まちづくり関係者等と共有を図り、名張かわまちづくり協議会を開催する運びとなった。（図-3）

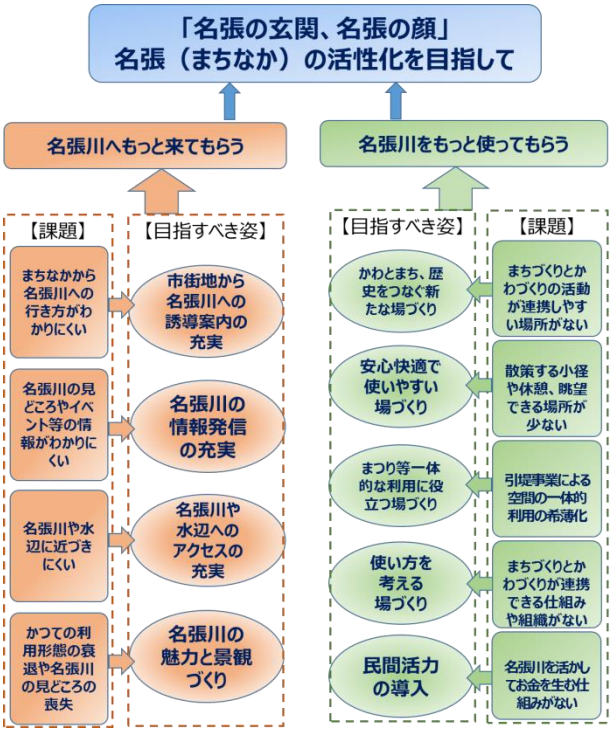


図-３　名張かわまちづくりの目指すべき姿

⑶ 協議会の設立

平成31年12月4日の協議設立総会を開催され、名張かわまちづくり協議会の設置が承認された。構成員としては名張川ワークショップの中心メンバーである名張市、名張市地域づくり代表者会議、名張商工会議所に、「民間活力の導入」や「環境学習」等といった名張川の更なる活用の裾野を拡げるため新たに「観光協会」及び「名張市教育委員会」を含めるものとなった。

協議会には、にぎわい創出に関する河川空間の具体的な利活用を議論する場として「実行部会」を設置した。（図-4）

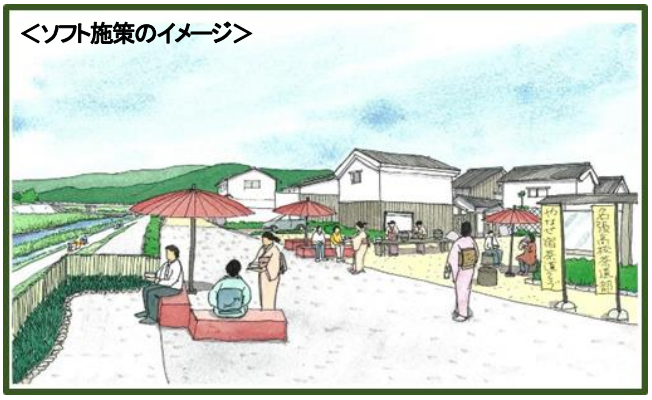
協議会	実行部会
協議会の役割	**部会の役割**
○かわまちづくりの計画策定及び方針決定 ○にぎわい創出に関すること ○民間等事業者等による河川空間の利用促進	○イベント内容の検討・実施 ○実施に向けた詳細や役割分担の検討 ○協議会への報告

図－４　協議会及び実行部会の役割

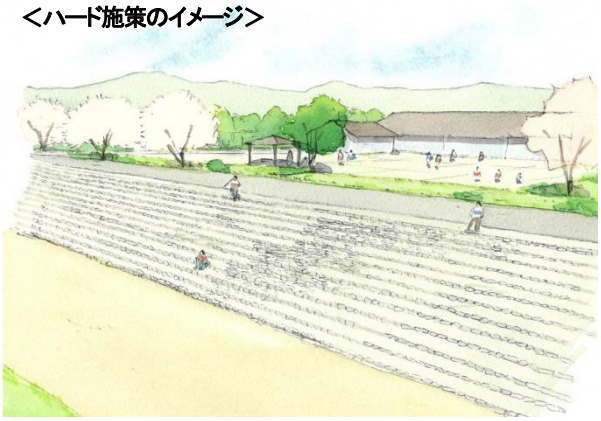
⑷ 実行部会の取り組み

「名張の玄関、名張の顔」として、名張（まちなか）の活性化の実現に向け、名張川を活かした具体的な利活用（ソフト施策）、及び国土交通省が支援する利活用に対する有効的なハード施策の内容について議論した。

（図-5）（図-6）（図-7）



図－５　水辺での野点利用イメージ



図－６　花火大会等が鑑賞できる階段護岸を整備

図－７　新緑の「山並み」と季節を愛でる空間を整備

⑸ 名張かわまちづくり計画登録

実行部会での検討を踏まえ、名張川かわまちづくりの整備内容が固まったことから、推進主体である協議会が「名張かわまちづくり計画」を作成し、平成31年1月21日付けで名張市長（協議会会長）から国土交通省　水管理・国土保全局長に計画を申請する運びとなり、平成31年3月8日付けで登録された。

⑹ 名張かわまちづくり計画登録証の伝達

平成30年度に新規登録された「名張かわまちづくり計画」の登録証伝達式を平成31年3月28日に開催した。（写真-7）

本計画では、名張川の引堤等の河川改修と併せ、河川空間と地域の歴史資源との回遊性を向上させるほか、名張川と宇陀川の合流地点である自然環境を活かした水辺と親しめる場として、「親水空間」等の整備を行いながら、観光振興・地域活性化の促進を図ることを協議会メンバーで確認した。

国土交通省においてはこの取り組みに対してハード施策として必要な河川管理施設の整備等の支援を実施していく。

写真－７　登録証の授与

6.今後の展開

⑴ 地域と連携したハード施策の整備に向けて

今後、登録された「名張かわまちづくり計画」のハード整備については、協議会構成員だけでなく地元への理解も必要となることから、地域住民に利便性、快適性、安全性等の意見を十分に聴きながら、地域の「知恵」も活かした魅力的な親水空間の創出を目指し、地域活性化に寄与できる設計を進めていく。

⑵ 河川空間の利活用促進

協議会構成員間のイベント協力・交流のアイデアにより利活用の連携強化を進めていくとともに、地域住民に名張かわまちづくりの存在を浸透され、日頃から恒久的に賑わいを創出することを目指す。（写真-8）

写真－８　協議会での意見交換

⑶ 情報発信による地域住民への名張かわまちづくりの浸透

名張かわまちづくりの活動や魅力を地域住民や観光客等に幅広く発信していくため、協議会と連携し、ホームページ等を通じて「名張の玄関、名張の顔」として情報発信にも力を入れていく。

7.まとめ

今回、多様な視点に基づき、意見交換を行った結果、地域と合意形成し、協議会設立、かわまちづくり登録に至ることができた。

今後も引き続き、地域との合意形成を取りながら、他事業との連携も取りながら事業を推進していく。

かわまちづくり事業は、整備後も恒久的に活用され、地域全体の賑わいを創出することが重要である。

現在、かわまちづくり登録がなされて河川空間の利活用向けての気運が高まっているが、年月が経つと共に、機運が無くなることが懸念されることから、高まっている気運を持続可能なものとすることが必要不可欠である。

そのためには、イベントなどの取り組みを通して、地域住民に名張かわまちづくりを知ってもらい、存在が浸透されることが重要である。

名張かわまちづくり協議会の構成員は、今まで各々による個別の活動していたが、名張かわまちづくり計画登録を契機に、各々の活動が連携して川とまちをつなぐ取組みができる仕組みが構築された。

構成員には、商工会議所や観光協会、鉄道会社など、各々の特徴を有しており、これらが組み合わさる事で、幅広い新しい活動がなされる無限大の可能性を秘めている。今後、構成員としっかり連携し、川とまちをつなぐ取り組みを行い、地域活性化、及び地域発展の促進を図りたい。